

番号	名称(図柄)	奉納年月日	西暦	銘文	絵師	寸法縦×横	形態	色彩の有無
16	天満宮由緒書類	昭和39年6月25日	1964	<p>由緒</p> <p>抑々天満宮は菅原道実公を祭り給じ、公は承和十二年文学博士菅原是善氏の長男として生まれ生来頭脳優る、十一才にして作詩し長ずるに及び文武両道に達す醍醐天皇に其才をみとめられ国政に参与五十五才にして右大臣となる、然るに左大臣藤原時平氏の妬むところとなり讒言され延喜元年一月二十五日太宰府に移さる、太宰府にありても日々皇室の御安泰を祈り子弟を集め学問習字を教え延喜三年二月廿五日歳五十九才を一期として永眠さる、其の後正義は天に通じ右大臣正二位に叙せられる学問の神として京都北野天満に祀られたり、北野天満は小生宅蔵書の天正五年の縁起由緒書に依れば今より六百貳拾年の昔、徳治元年頃前原統きの脇ヶ浜に童子天神として薬師如来沖より波に乗り上げササクネと云う磯石に御腰をかけた御神体あり、其の訳は御神体に印あり海中にお住まいなさる事流れ伝わる、時に正慶元年八月廿三日毎日七時半時にまれば子供の姿と見い須賀へ上がり二三人の子供と遊び居る様なり、浜の人々不思議に思ひ一同身を清めて近寄り見れば右の御神体に見いける、脇ヶ浜の城主梶原豊後守殿に申し上げれば神立せしとの御下知あり九月一日脇ヶ浜村一同神立湯立し奉り童子天満宮を示願しける、其の後别当京都に登って童子天満宮由緒を申し上げれば北野天満宮御别当より九州筑前の国太宰府天満宮御分霊の御諭しあり、延慶元年太宰府天満宮より更に御神体を勧請し奉る急ぎ脇ヶ浜に帰国童子天満宮と合祭せり、其の後慶長中脇ヶ浜村中は太繁昌したと伝わる、後木戸川大洪水にして脇ヶ浜は流失村民は大谷繁岡に移転し天満宮社だけが残り御宮も危険の状態にせまり、名主等相計り元和元年八月廿五日上ノ原に遷宮せしも又波濤の侵す所となり明治十二年六月廿五日現地に遷宮す、昭和廿四年拜殿新築、昭和三十八年本殿の改造有り信仰者は後を絶えず、嗚呼神よ永久に鎮り給いて産生子等並びに崇敬者を護り給いと曰す</p> <p>昭和三十九年六月廿五日 奉納者氏子総代 橋本新一</p>		71 168	横長額入	墨
⑰	算額	明治27年7月	1894	<p>奉納</p> <p>今有如図以等円二個作三ヶ月形、其透容仁義礼智四円、只云、仁義円径和乘智円径三寸。又云智礼円径和乘仁円径四寸。别云礼円積二歩。問義円積幾何。答曰、義円積一歩五合。術曰、以又云除只云。乘別云得義円積、合問。</p> <p>最上流佐久間續門人 磐城国楡葉郡富岡村 関根熊吉撰 明治二十七年七月 昭和五十九年八月 相馬和算研究保存会校閲復元奉納 氏家義之 庄司国男</p>		45 60	横長	有